

原田岡山第2号古墳

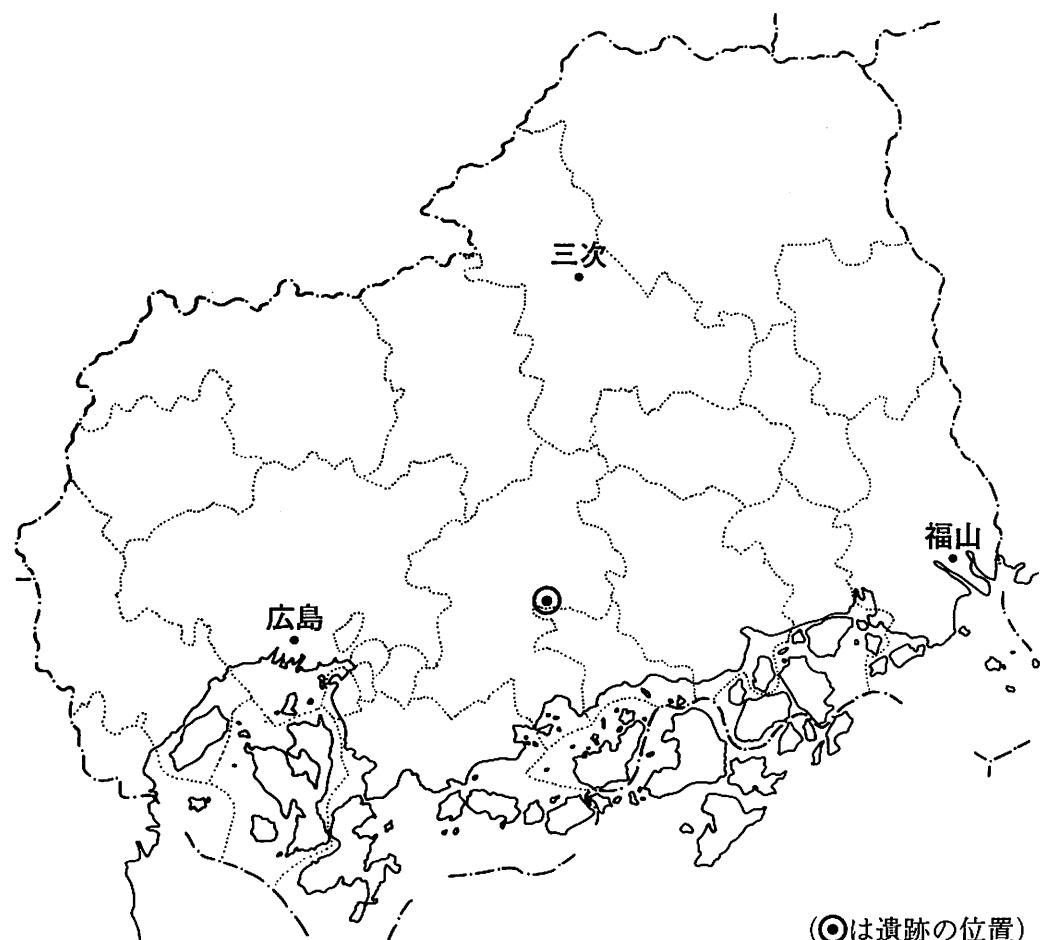
東広島呉自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2007

財団法人 広島県教育事業団

原田岡山第2号古墳

東広島呉自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(4)



2007

財団法人 広島県教育事業団



原田岡山第2号古墳空中写真（北上空から）

例　　言

- 1 本書は、平成17年度に調査を実施した東広島呉自動車道建設事業に係る原田岡山第2号古墳（広島県東広島市高屋町）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国土交通省中国地方整備局広島国道事務所から委託を受け、財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は伊藤 実、梅本健治が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は鍛治益生を中心に埋蔵文化財調査室の職員が行った。
- 5 本書は、鍛治が執筆・編集を行った。
- 6 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。
- 7 本書に使用した北方位はすべて平面直角座標第Ⅲ座標系北である。
- 8 第1図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図（白市）を使用した。

目　　次

I	はじめに	(1)
II	位置と環境	(2)
III	調査の概要	(5)
IV	検出の遺構	(6)
V	出土の遺物	(9)
VI	まとめ	(11)

卷頭図版目次

卷頭図版 原田岡山第2号古墳空中写真（北上空から）

挿　図　目　次

第1図	周辺遺跡分布図（1:25,000）	(3)
第2図	遺跡周辺地形図（1:2,000）	(5)
第3図	原田岡山第2号古墳地形測量図（1:200）	(7)
第4図	原田岡山第2号古墳墳丘遺存図（1:200）	(7)

- 第5図 墳丘断面図（1：120） (8)
 第6図 列石実測図（1：40） (折込)
 第7図 石室実測図（1：40） (折込)
 第8図 出土遺物実測図（1：3） (10)

図版目次

図版1	a 遺跡遠景	(北西から)	図版5	a 遺物検出状況
	b 遺跡近景	(北西から)		b 同上
	c 調査前全景	(西から)		c 同上
図版2	a 列石検出状況	(東から)	図版6	a 基底石検出状況 (東から)
	b 同上	(北東から)		b 同上 (北から)
	c 溝検出状況	(東から)		c 掘方完掘状況 (東から)
図版3	a 石室検出状況	(南から)	図版7	出土遺物
	b 同上	(北東から)		
	c 同上	(南東から)		
図版4	a 石室検出状況	(西から)		
	b 同上	(南西から)		
	c 同上	(南東から)		



現地見学会風景

I はじめに

原田岡山第2号古墳の発掘調査は、東広島呉自動車道建設事業に係るものである。本事業は、山陽自動車道、広島呉道路とともに、広島市・東広島市・呉市とを結ぶ広島都市圏東部地域循環型ネットワーク形成に必要な高規格幹線道路で、テクノポリス計画をはじめ地域の経済・産業・文化の発展に寄与するとともに、沿線都市間の連携・交流を大きく促すなどの目的のために建設されるものである。

建設省（現国土交通省）中国地方整備局広島国道事務所（以下、「広国事務所」という。）は、平成7（1995）年2月21日、当該事業予定地内の文化財の有無及び取扱いについて東広島市教育委員会に協議した。さらに平成16年7月30日、設計変更に伴い広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）に文化財等の有無及び取扱いについて再度協議書を提出した。県教委は同年10月13日、広国事務所に対して、原田岡山第2号古墳が存在する旨を回答した。原田岡山第2号古墳の取扱いについて県教委及び広国事務所は協議を重ねたが、路線変更等による現状保存は不可能との結論に達した。

平成17年1月14日付けで広国事務所から「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」が県教委あてに提出され、県教委は平成17年1月31日付けで、広国事務所あてに、工事着手に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。このため、広国事務所は平成17年2月21日付けで財団法人広島県教育事業団に発掘調査の依頼を出し、事業団は同年5月16日から7月1日まで発掘調査を実施した。

なお、平成17年6月18日（土）に本遺跡の遺跡見学会を開催し、約150名の参加者があった。本報告書は、このような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、当該地域の歴史解明のための一助となれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局広島国道事務所、東広島市教育委員会及び地域の方々の多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

II 位置と環境

原田岡山第2号古墳は広島県東広島市高屋町溝口に所在する。原田岡山古墳群は溝口地区の南側に位置する馬ヶ背（標高456m）北側の、標高250～270m付近の尾根上に造られた4基の古墳群で構成されている。このうち第1号古墳と第3号古墳は、山陽自動車道建設に先立って平成元（1989）年に発掘調査が実施され⁽¹⁾、いずれも横穴式石室を埋葬施設とする6世紀後半から7世紀にかけての後期古墳であることが明らかとなっている。とくに第1号古墳は、今回調査を行った第2号古墳同様に、古墳の墳丘端に外護列石を有する古墳であった。

ところで、原田岡山古墳群が所在する高屋地区は西条盆地の東端部にあたり、沼田川の支流入野川水系の河川によって形成された矮小な沖積地が複雑に入組んだ地形を呈し、この沖積地を臨む低丘陵上に数多くの遺跡が存在することで知られている。とくに、弥生時代中期後半以降、遺跡はその数を増大させる傾向にある。ここでは、高屋地区に所在する弥生時代と古墳時代の遺跡を中心に、周辺の遺跡を概観する。

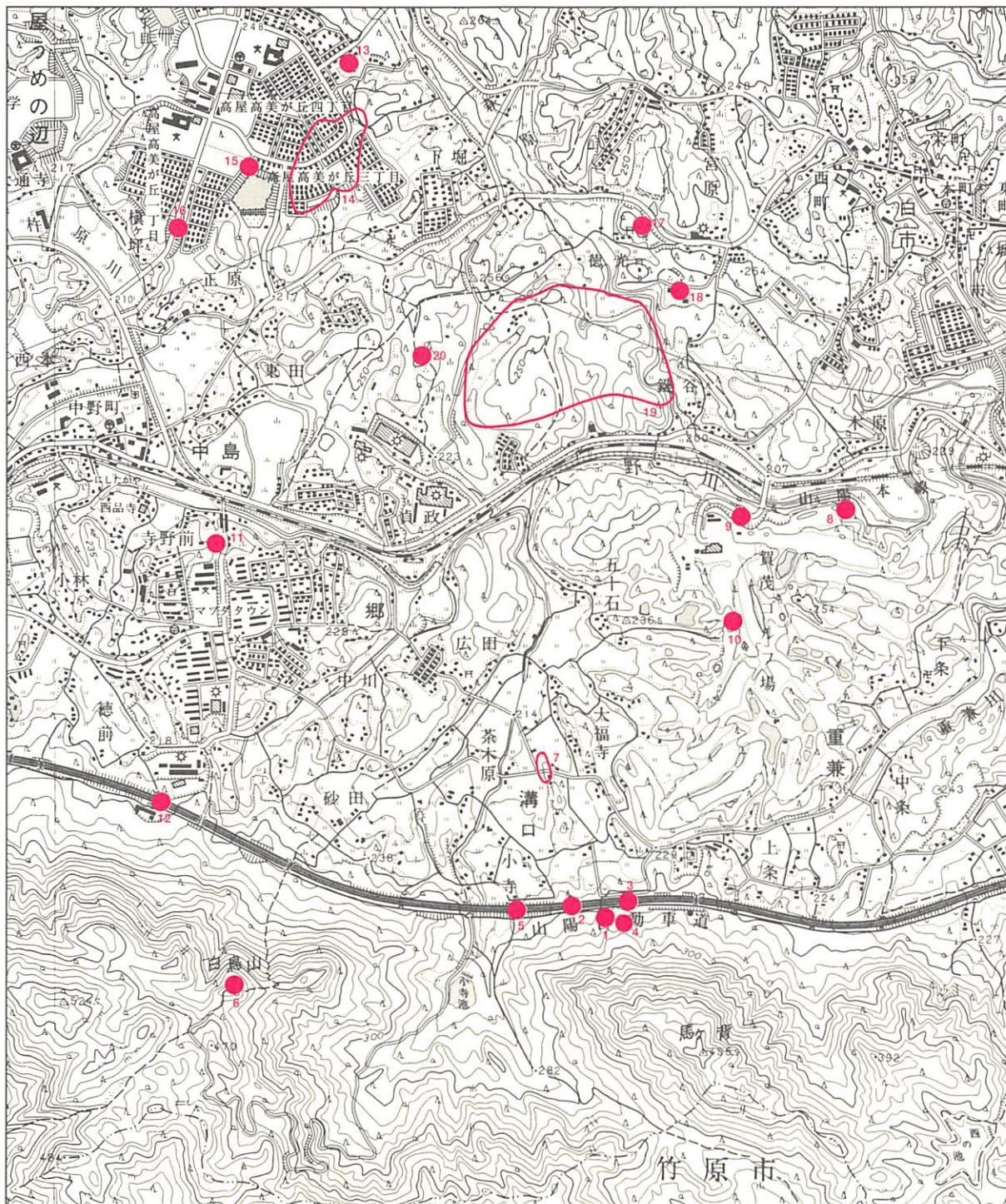
弥生時代の遺跡としては、中期後半の集落跡である宮領1号遺跡⁽²⁾、西本6号遺跡⁽³⁾などがある。両遺跡からは、当該期の住居跡や土坑墓などが検出されている。後期の遺跡としては浄福寺1号・2号遺跡をはじめとした東広島ニュータウン遺跡群⁽⁴⁾があげられる。同遺跡群では数多くの住居跡をはじめ、墳墓群が多数検出された。

古墳時代の遺跡としては、古墳時代前期に属すると考えられる古墳が当該地域に比較的多くみられる。高屋地区と西条地区との境界付近に位置する才が迫第1号古墳⁽⁵⁾は、2基の小型の竪穴式石室を埋葬施設とする古墳である。また溝口地区を見下ろす白鳥山頂部に位置する白鳥古墳は竪穴式石室を埋葬施設とする古墳で、三角縁神獣鏡、斜縁神獣鏡などが出土している。さらに近年発掘調査が行われた原の谷古墳⁽⁶⁾では、埋葬施設がほとんど壊されていたものの、竪穴式石室を埋葬施設とする古墳であったことが明らかとなった。

古墳時代中頃の古墳としては、碧玉製石釧、珠文鏡を副葬した仙人塚古墳などがある。また、5世紀後半から6世紀の古墳としては当該地域にはあまり見られない前方後円墳である森信第1号古墳を含む森信古墳群や福岡山古墳群などが知られている。

後期古墳としては、横穴式石室を埋葬主体とする原田岡山古墳群⁽⁷⁾をはじめ、志村古墳群⁽⁸⁾などが発掘調査されている。

古墳時代の集落跡としては、前半期のものとして西本6号遺跡⁽⁹⁾、原の谷遺跡⁽¹⁰⁾などがあり、後半期のものとして志村遺跡⁽¹¹⁾、柳原遺跡⁽¹²⁾、高屋東1号遺跡⁽¹³⁾などが知られている。



- 1 原田岡山第2号古墳 2 原田岡山第1号古墳 3 原田岡山第3号古墳 4 原田岡山第4号古墳 5 溝口1号遺跡
 6 白鳥古墳 7 溝口2号遺跡 8 木原向山第1~3号古墳 9 鍵向山第2号古墳 10 鍵向山第1号古墳
 11 原の谷遺跡 12 宮領1号遺跡 13 天神遺跡 14 淨福寺1~3号遺跡 15 胡麻4号遺跡 16 横ヶ坪3号遺跡
 17 森信1号古墳 18 森信第10号古墳 19 福岡山古墳群 20 仙人塚古墳

第1図 周辺遺跡分布図（1：25,000）

註

- (1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「原田岡山古墳群」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(X)
1994年
- (2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「宮領1号遺跡」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(IX) 1993年
- (3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「西本6号遺跡」 1997年
財団法人東広島市教育文化振興事業団「西本6号遺跡発掘調査報告書」 1996年
淡神文化財協会「西本6号遺跡発掘調査報告書」 1995年
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「東広島ニュータウン遺跡群」I～V 1990～1993年
- (5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「才が迫第1号古墳」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(IX)
1993年
- (6) 東広島市教育委員会「原の谷遺跡発掘調査報告書」 1985年
財団法人東広島市教育文化振興事業団「原の谷古墳・原の谷遺跡発掘調査報告書」 2003年
- (7) 註(1)と同じ
- (8) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「志村遺跡」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(VII) 1992年
- (9) 註(3)と同じ
- (10) 註(6)と同じ
- (11) 註(8)と同じ
- (12) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「柳原遺跡」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(IX) 1993年
- (13) 財団法人東広島市教育文化振興事業団「高屋東1号遺跡発掘調査報告書」 1994年

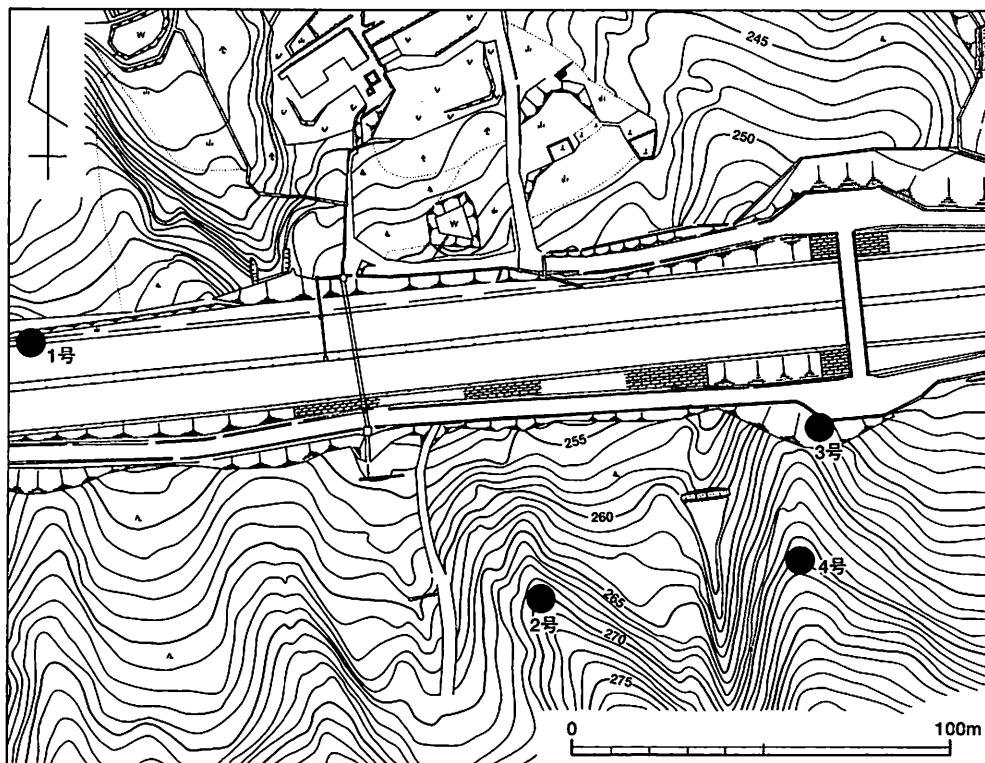
III 調査の概要

原田岡山第2号古墳は、4基で構成される同古墳群中もっとも高い位置に造られており、調査当初は横穴式石室の開口方向が西側であると考えられていた。しかし発掘調査の結果、石室の開口方向は第1号古墳・第3号古墳同様に東側であることが明らかとなった。

墳丘は、部分的に盛土が認められるものの、ほぼ地山の削り出しによって成形されており、また丘陵奥側は半月状に溝を掘り、墓域を区画している。また、墳丘の北東側では盛土の崩壊を防止する目的の石垣状の外護列石が認められた。

石室は、尾根筋に直行し東側に開口する形で構築されている。石室の石材は後世の攪乱のために奥壁は抜き取られていたが、側壁については比較的遺存していた。石室の平面形は、石室入口側の幅が狭く、奥壁側に向けて幅が広がる形状を呈していた。

石室内からはほぼ底面に密着した状況で須恵器の壺、杯身・杯蓋、提瓶などが出土した。また、溝内からも供獻されたと考えられる壺や聰が出土した。



第2図 遺跡周辺地図形（1：2,000）（●は古墳位置）

IV 検出の遺構

墳丘と溝（第3～5図 図版2-c）

墳丘の現存高は溝底面から約70cm、石室底面から約1.3mである。墳丘の盛土は墳丘の南北方向については地山を削り出すことによって成形を行っており、東西方向については後述するよう北側が石室の掘り方がほとんどなく、直接地山土から石室を構築し、その裏込めとしての盛土が認められた。また南側については掘り方の裏込め土の控えとして若干の盛土が認められた。墳丘の規模は地山成形の状況などから直径約10mのほぼ円形の古墳と考えられる。

また、溝は、墳丘南側の丘陵奥側を幅約2mの半月状に掘削して、墓域を区画している。

外護列石（第6図 図版2-a・b）

石室入口から南側と北側の墳丘に沿って、半円形を呈する状況で外護列石を検出した。この外護列石は、20～30cmほどの横長の石を石垣状に据え付けたもので、部分的には数段積重ねて構築されていた。本古墳の外護列石は、地山に接する状態で据えられていたことから、外護列石を伴った他の古墳同様、墳丘の崩壊を防止する機能を有していたものと考えられる。

埋葬施設（第7図 図版3・4）

本古墳の埋葬施設は横穴式石室で、尾根筋とは直行する状況で東西方向に主軸を取り、東に向けて開口する。石室の天井石はほぼ失われていた。

石室の規模は、奥壁が後世の攪乱のためにすでに失われているため、明確にはしがたいが、南側側壁の残存状況から長さは約6mほどであったと推定される。幅は、石室入口側で約0.9m、奥壁側で約1.4mを測り、平面形が奥壁側に開くいわゆる羽子板状を呈する。

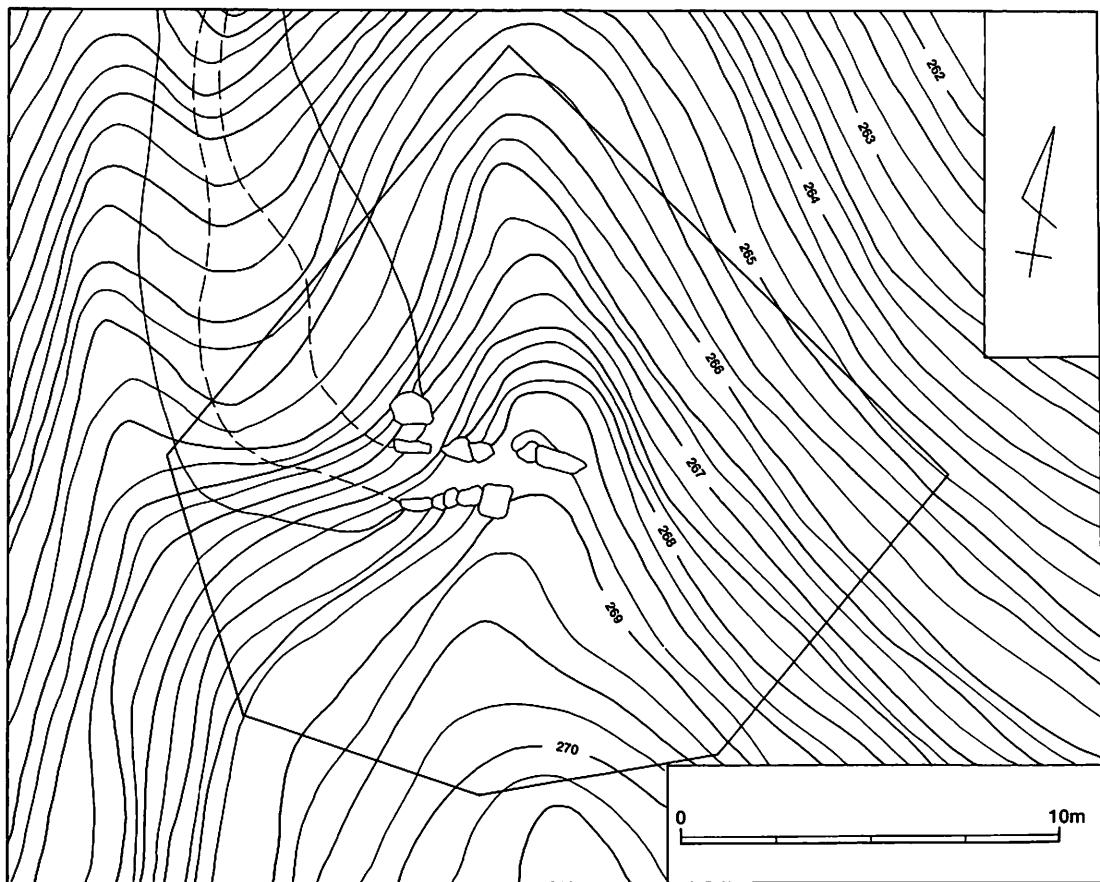
また、入口から約2.4m奥側に入った付近で両側壁に玄室と羨道とを分ける門柱石が存在するが、いずれも石室内部に突き出すことはなく、石室の平面形としては無袖式である。

側壁の高さは、玄室側の南側壁で約1.2m、北側壁で約1.1m、また羨道側では南側壁が約1.3m、約北側壁で0.9mである。

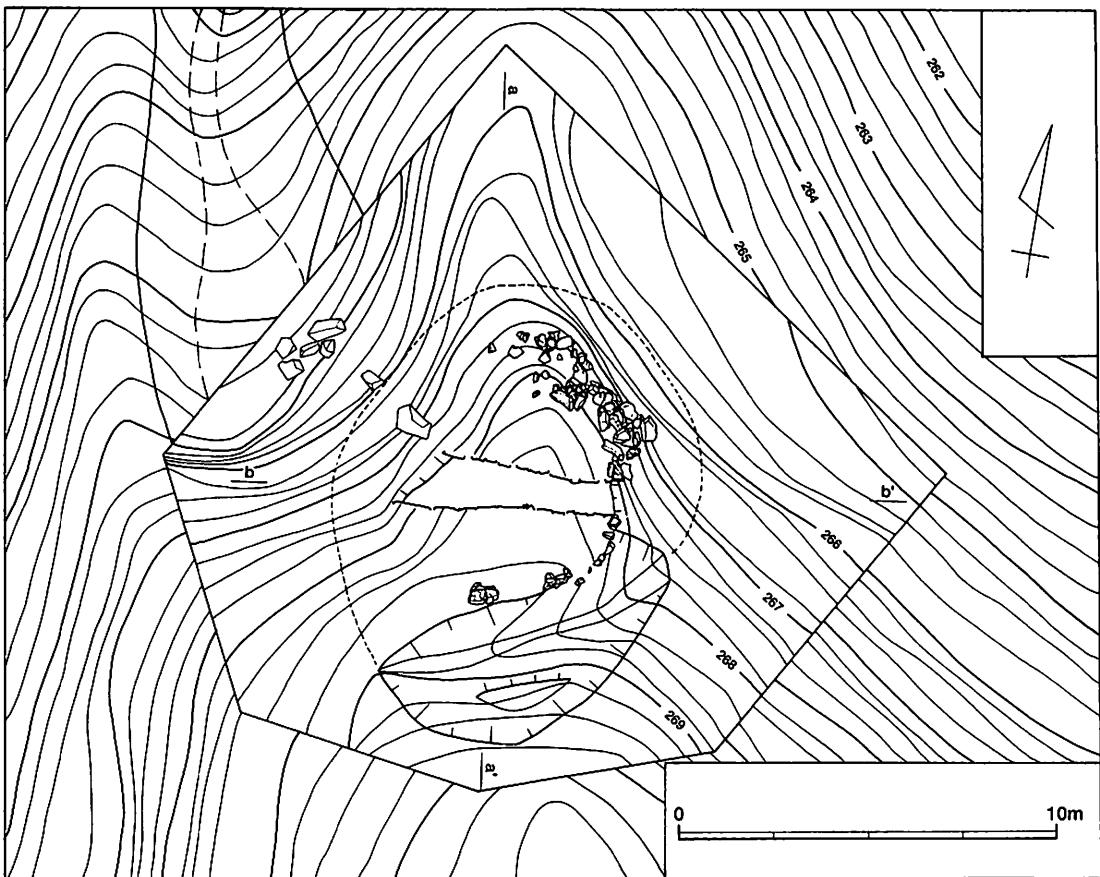
側壁の石の積み方はこの門柱石を境として、玄室側は基底石が広口面を石室内側に向けて据え、それより上方は3～4段横積している。羨道側は横長の小型の石をやや乱雑に横積している。なお、側壁はやや内傾した状況となっていた。

また、門柱石は長さが60～80cmの長方形の石材を立てたものである。さらにこの門柱石付近の底面に密着した状況で角礫を検出していることから、この石も玄室と羨道とを区別する仕切石としての機能を有するものと考えられる。

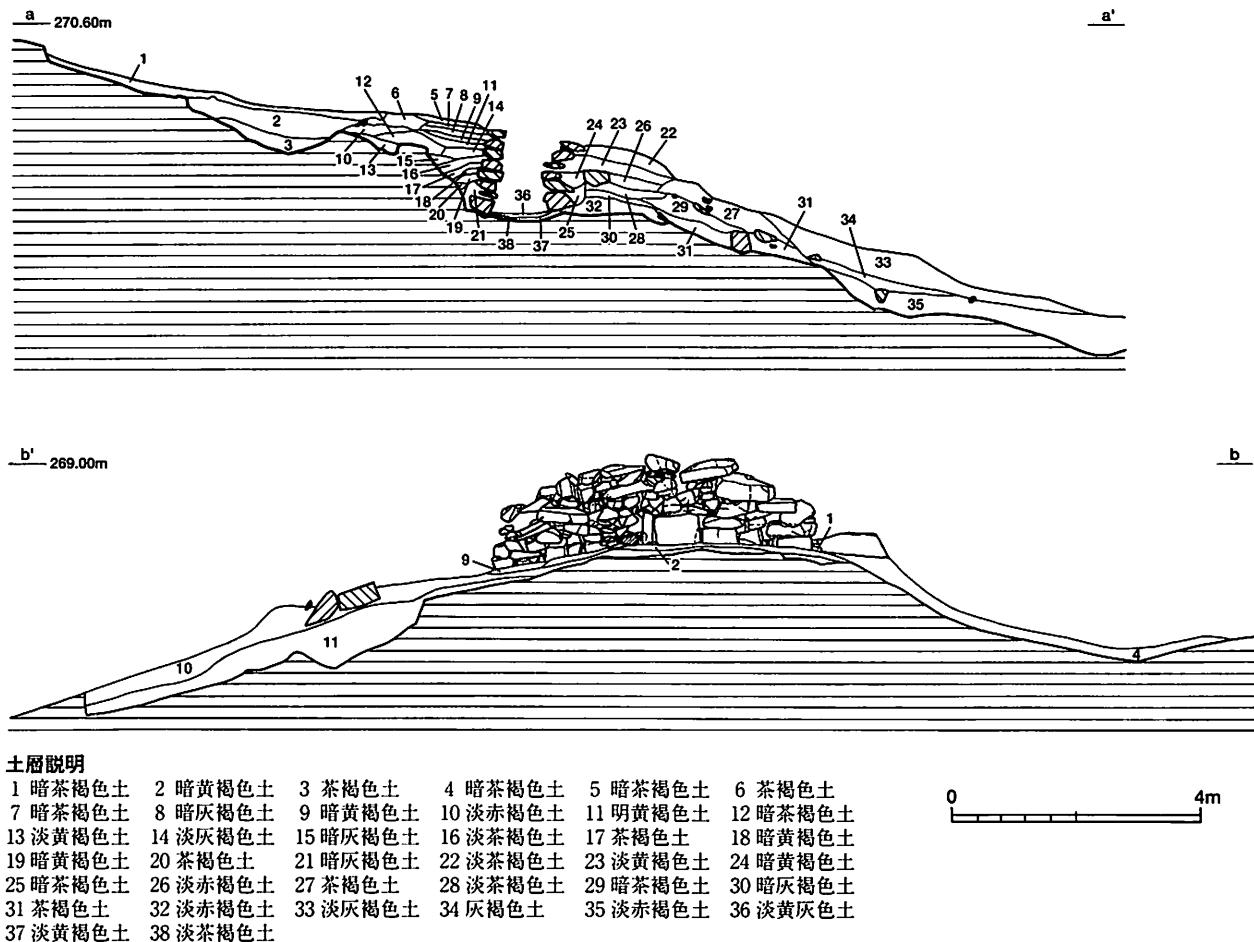
石室底面は玄室内ではほぼ平坦であるのに対して、羨道部では入口に向けて下がっている。また、玄室内では厚さ10cmほどの整地土が認められた。



第3図 原田岡山第2号古墳地形測量図（1：200）



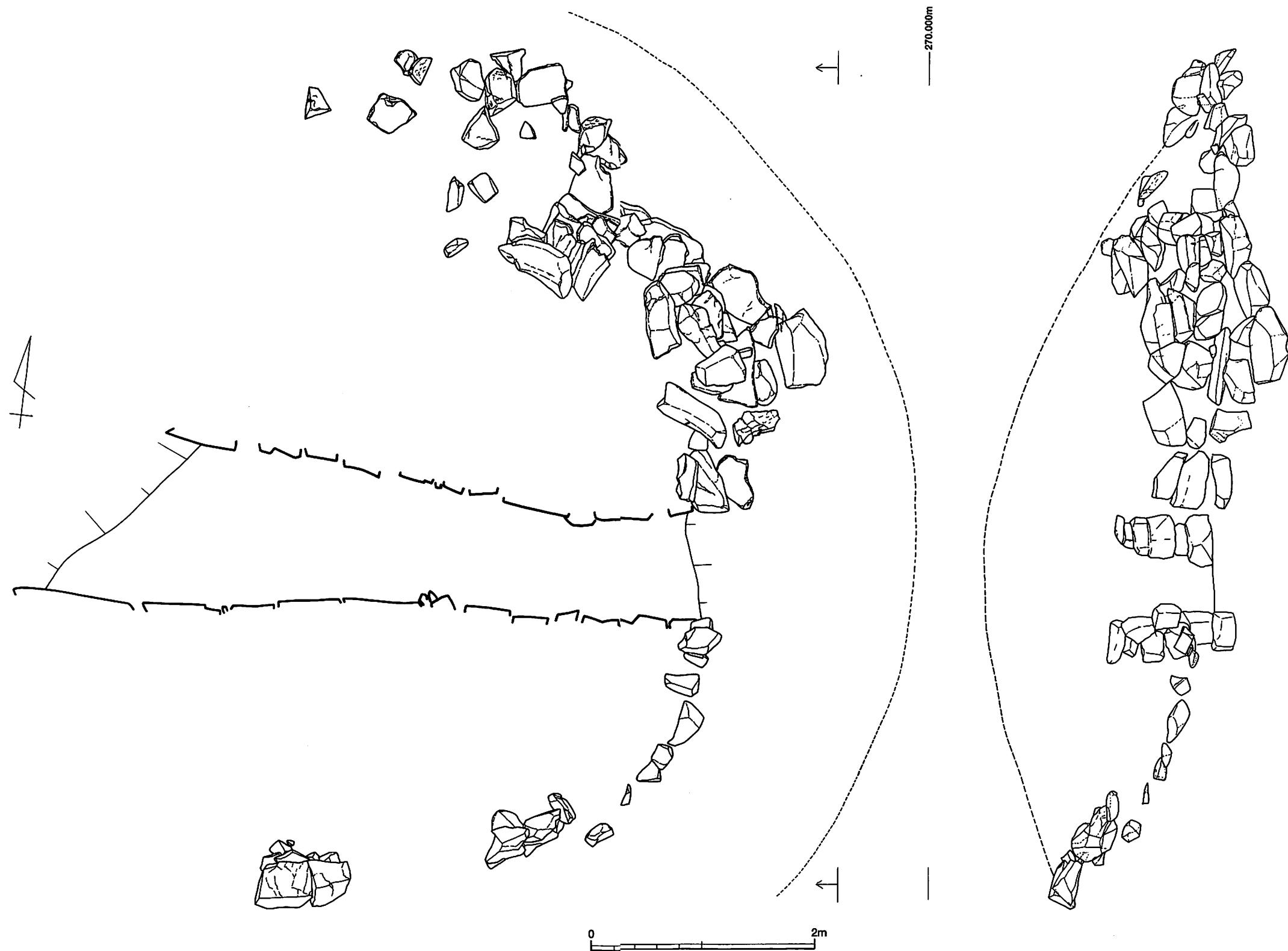
第4図 原田岡山第2号古墳墳丘遺存図（1：200）



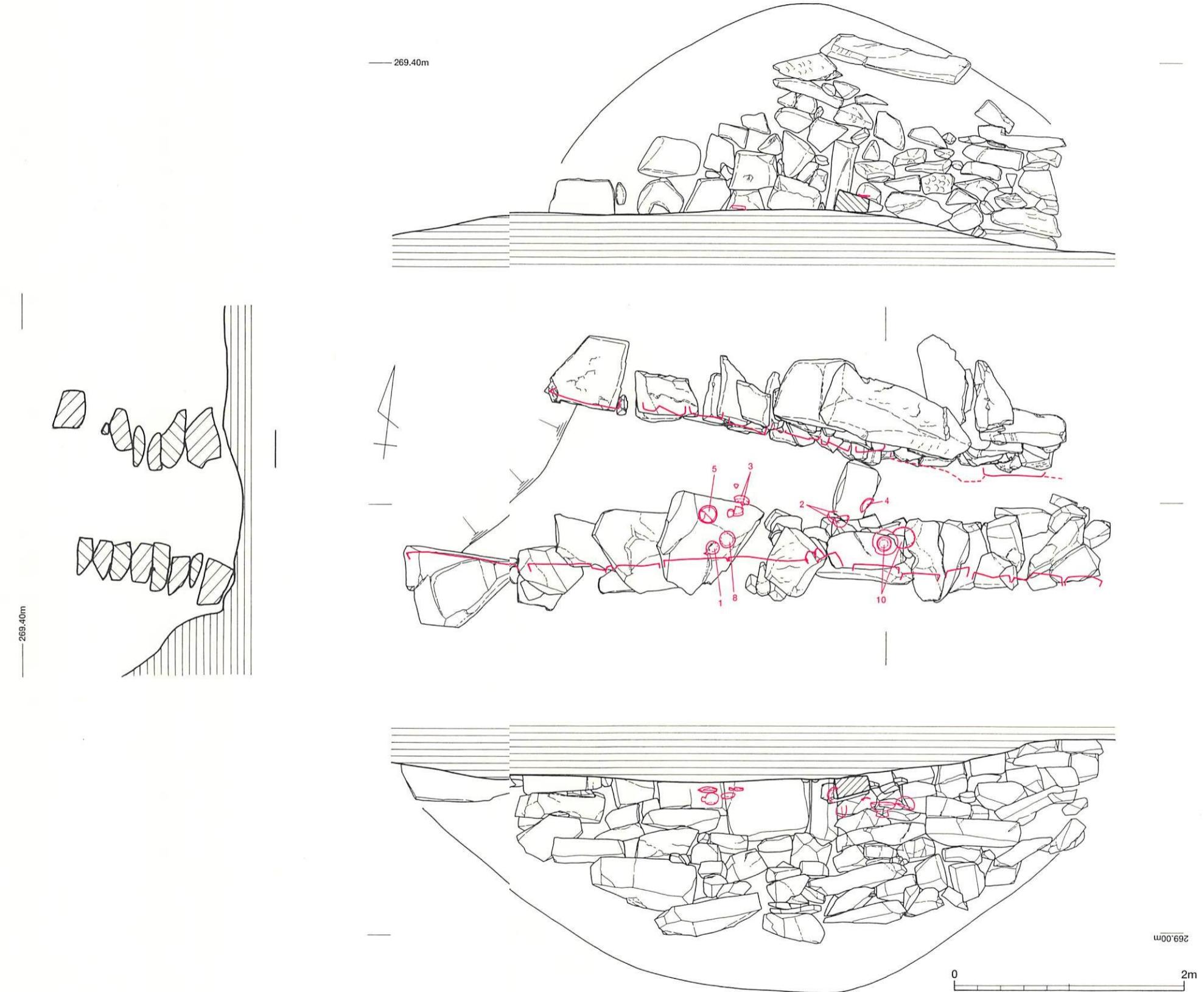
第5図 墳丘断面図 (1 : 120)

石室の掘方は、南では地山から掘り込まれており、石室側壁から70cm外側で、深さ約1m掘り込まれていた。南側壁と掘方との間には十数層の裏込め土があり、さらにその外側に控えの盛土が積まれていた。これに対して、北側壁では掘り込み面が明確ではなく、側壁が地山土から直接構築されており、裏込めとしての盛土が数層にわたって構築されていた。

出土遺物としては、石室内の門柱石付近とさらに奥壁側から須恵器の杯身・杯蓋、広口壺、提瓶が底面にはば密着した状態で出土したほか、溝や墳丘からも杯身、聰、壺などが出土した。



第6図 列石実測図 (1 : 40)



第7図 石室実測図（1:40）

V 出土の遺物

須恵器（第8図、図版7）

杯蓋（1～3） いずれも石室内から出土したもので、口径が比較的小さいものである。いずれも天井部は丸みを有する。1・2は、天井部から体部にかけて緩やかにカーブして下がり、口縁端部は丸く納める。3は、天井部から体部にかけて緩やかにカーブした後、口縁部にかけては垂下して終わる。いずれも、外面にはヘラ切り痕を有するほかは、回転ロクロナデである。胎土は細砂粒を含み、焼成は1が良好で、2・3はやや不良である。法量は1が口径13.2cm、高さ4.0cm、2が口径14.0cm、高さ4.2cm、3が口径14.4cm、高さ4.1cmである。

杯身（4～7） 4・5は石室内、6・7は墳丘から出土したもので、底部が丸みをもつもの（4・5）と、平底気味のもの（6・7）とに分かれる。また立ち上がり部は4・5が直線的ないし内湾気味に立ち上がり、6・7は強く外反して立ち上がる。調整は底部外面がヘラ切りで、ほかは回転ロクロナデである。また、立ち上がり部はオリコミ手法である。胎土は砂粒を含み、焼成は4・5がやや不良、6・7は良好である。法量は4が口径12.5cm、高さ4.2cm、5が口径13.0cm、高さ3.8cm、6が口径11.2cm、高さ3.4cm、7が口径13.6cm、高さ3.8cmである。

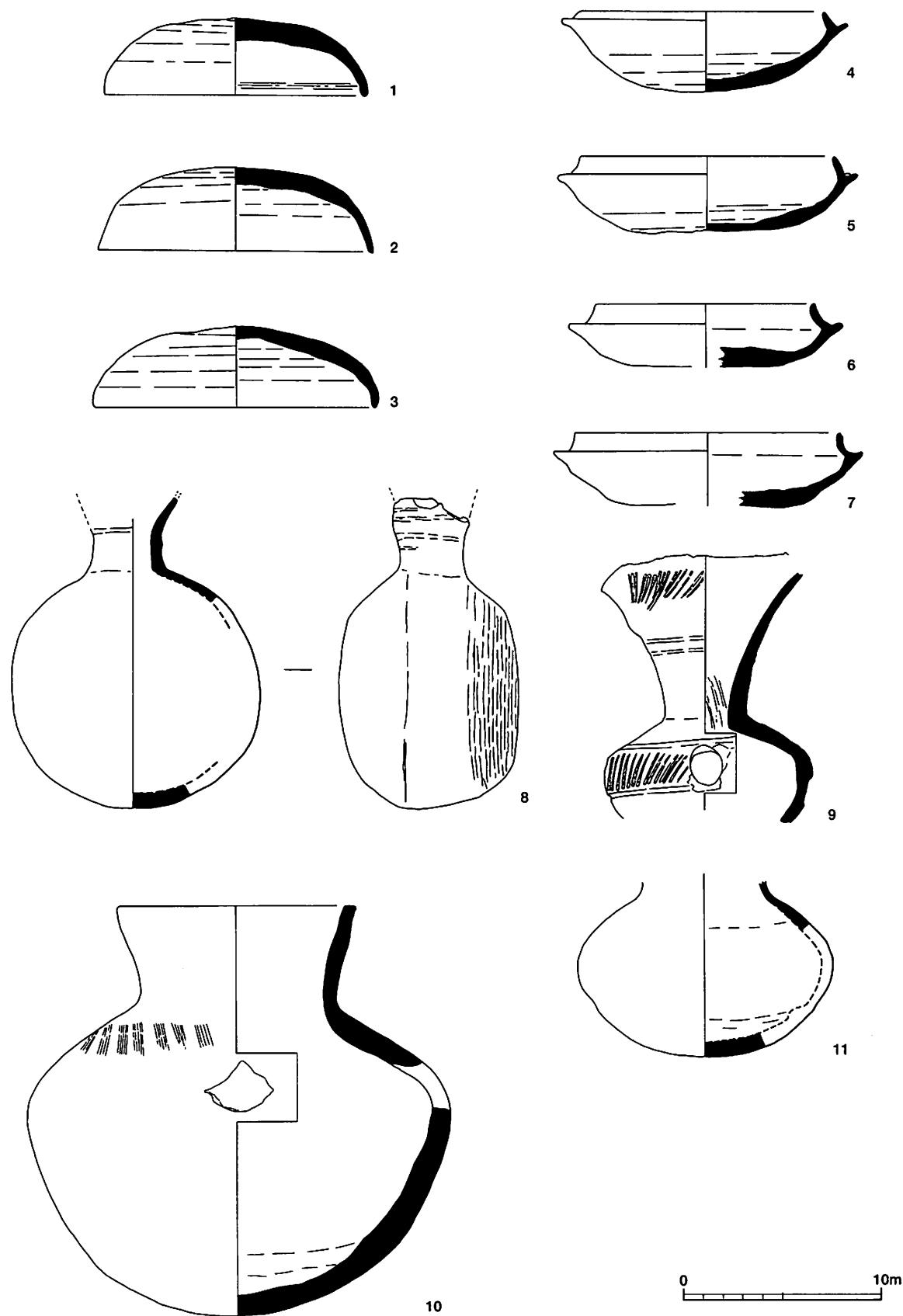
提瓶（8） 石室内から出土したものである。体部は円形を呈し、口頸部は体部肩部から垂直に立ち上がった後、口端部にかけて緩やかに外反する。頸部外面に浅い3条の凹線を有する。

調整は全体的に回転ロクロナデであり、体部の扁平な片面にはカキ目を有する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。法量は残高15.8cm、胴径12.8cmである。

はそう（9） 溝の南東部から出土したもので、口端部と体部下半から底部にかけて欠損している。体部の肩部と中位に沈線を廻らし、その間に櫛歯状工具による斜位の刺突文を廻らす。また、円孔を1箇所穿つ。口縁部は頸部より強く屈曲してラッパ状に外上方に開く。口縁部中位外面には2条の沈線を廻らし、その上方に櫛歯状工具による斜位の刺突文を施す。調整はいずれも回転ロクロナデで、口頸部内面にはしほり目を残す。胎土は細砂粒を少量含み、焼成は良好である。法量は残高13.6cm、胴径10.6cmである。

広口壺（10） 石室内から出土したもので、体部中位ほどで上下に分かれて出土した。口縁部は頸部から直線的の外上方に長く延び、端部は矩形を呈する。体部は、中位よりやや上方で強く張り、体部下半は緩やかにカーブして丸みをもった底部にいたる。頸部付近には、部分的に細かなタタキ目を残す。調整は、内外面ともヨコナデで、底部内面に強いナデツケ痕跡を残す。また、体部中位には焼成後の外面から内面にあけた穿孔痕跡を残す。胎土は大き目の砂粒を多く含み、焼成は良好である。法量は口径12.2cm、器高21.0cm、胴径21.8cmである。

壺（11） 溝中から出土したものである。口縁部を欠損している。体部は中位が強く張り、そろばん玉形となる。調整は内外面とも回転ロクロナデである。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。法量は残高9.6cm、胴径13.0cmである。



第8図 出土遺物実測図 (1 : 3)

VII まとめ

今回の原田岡山第2号古墳の発掘調査では、横穴式石室を埋葬施設とした外護列石を伴った古墳であることが明らかとなった。ここでは、すでに発掘調査がなされた原田岡山第1号・第3号古墳と比較しながらまとめとしたい。

原田岡山第2号古墳は発掘調査以前の石取りのために天井石や奥壁が失われた状態であり、残存状況は良好ではなかった。墳丘は大半が地山を削り出して成形しており、丘陵の奥側に溝を掘り込んで墓域を区画するものである。一方、第1号古墳・第3号古墳においては比較的大量の盛土を有している。

また、第2号古墳では石室の入口から墳丘を廻る状態で外護列石が確認されており、墳丘の崩壊を防止する目的のために構築されたものと考えられる。このような状況は第1号古墳と同様なものであるが、第1号古墳については外護列石が墳裾にほぼ全周する状態である点が異なる。

石室については、第2号古墳では奥壁側が後世の攪乱によって失われているため、全体の規模等については明らかではない。側壁は奥壁側を除いて比較的残存する。このうち羨道部と玄室部との境には門柱石があり、また床面においても仕切石を置いて区画している。側石は羨道部では比較的小型の石を横長に積んでいるのに対して、玄室側では基底石は広口面を横長に、それより上部は横積にしている。

また、門柱石や仕切石を有する点は第1号古墳においても認められており、この点においても第1号古墳と第2号古墳との繋がりが強かったことが窺えよう。

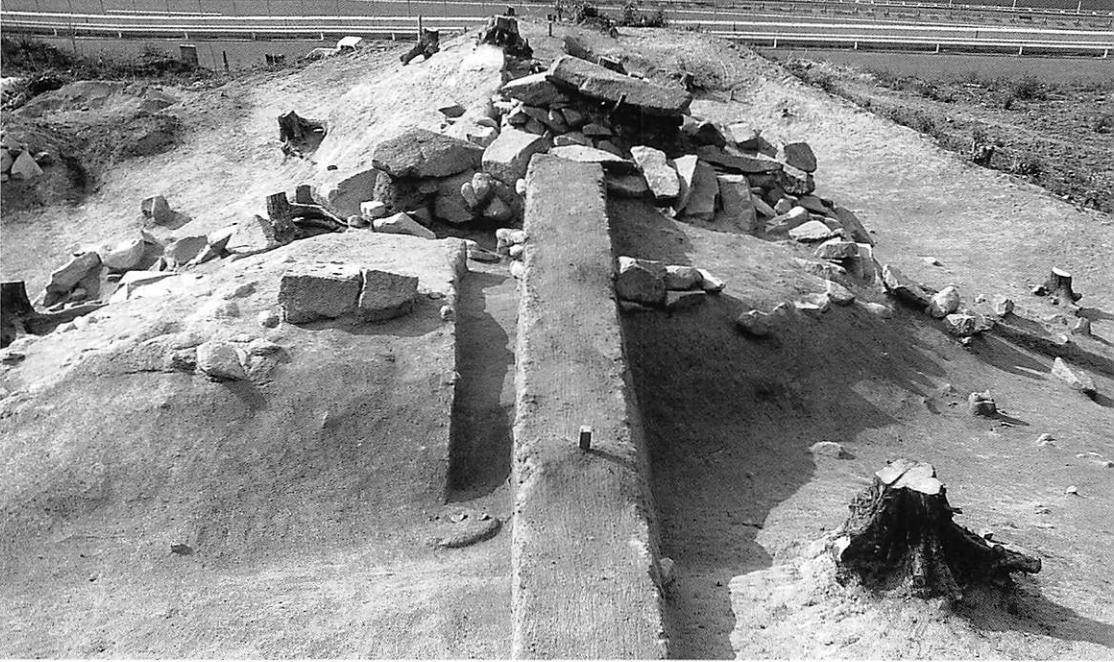
一方、この古墳が築造された時期については、古墳の石室内や周辺部から出土した須恵器の杯身・杯蓋は器高が低く扁平で、また杯身の内側の立ち上がり部が短く立ち上がるなどの特徴から6世紀後半から7世紀前半と想定される。第1号・第3号古墳の築造年代は、第1号古墳が6世紀後半、第3号古墳が6世紀後半から7世紀前半と推定されていることから、第2号古墳が第1号・第3号古墳の築造年代とほぼ同時期で、継続して築造されたものと考えられる。

ところで、遺跡の北側を流れる入野川の南側地域において横穴式石室を埋葬施設とする古墳としては、志村古墳群・鍋屋古墳群などの存在が知られている。このうち発掘調査が行われた志村古墳群では8基の横穴式石室を埋葬施設とする古墳が確認された。古墳群は丘陵斜面の狭い範囲で密集した状況で構築されていた。いずれも墳丘・埋葬施設ともに小規模で、その築造年代は6世紀後半頃と推定されている。また、これらの古墳を築造した集団については、小規模な谷水田を生産基盤とした集団が想定されている。

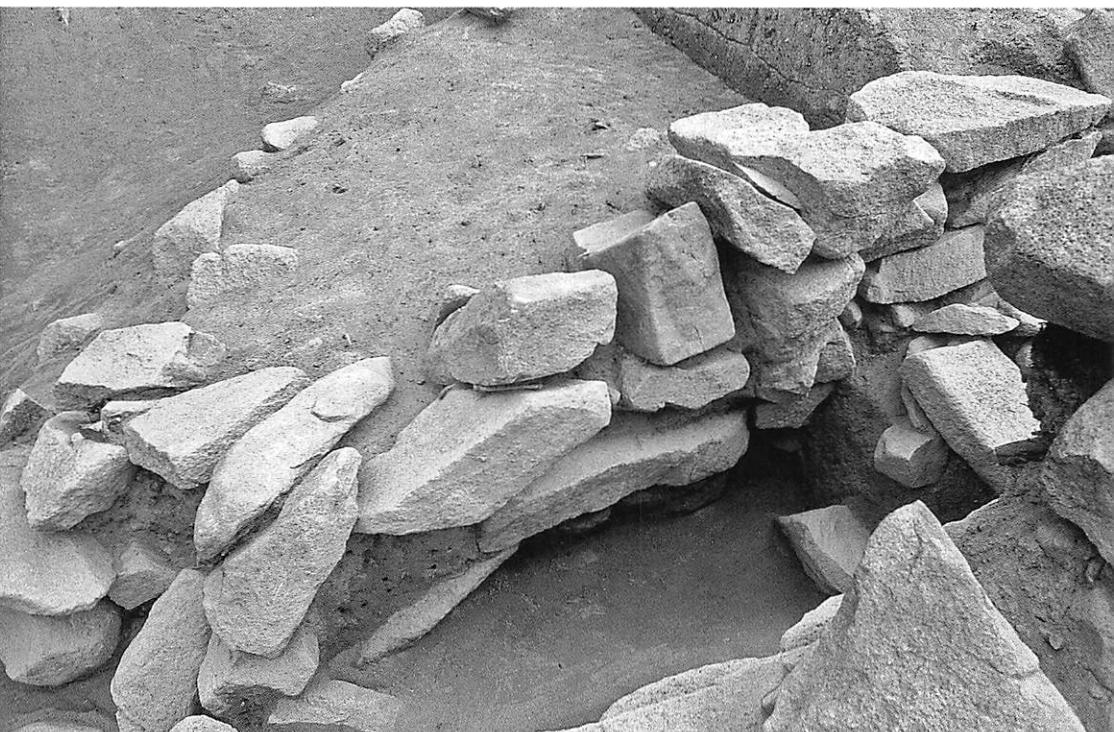
一方、原田岡山古墳群は遺跡の北側に比較的広い可耕地が広がっており、墳丘の裾部に外護列石を有するなど志村古墳群とはやや趣を異にした感がある。本古墳群は6世紀後半から7世紀にかけて溝口地域を地盤とした有力集団によって築造された一連の古墳であったと考えられよう。







a 石室検出状況
(南から)



b 同上 (北東から)



c 同上 (南東から)



a 石室検出状況
(西から)



b 同上 (南西から)



c 同上 (南東から)



a 遺物検出状況



b 同上



c 同上



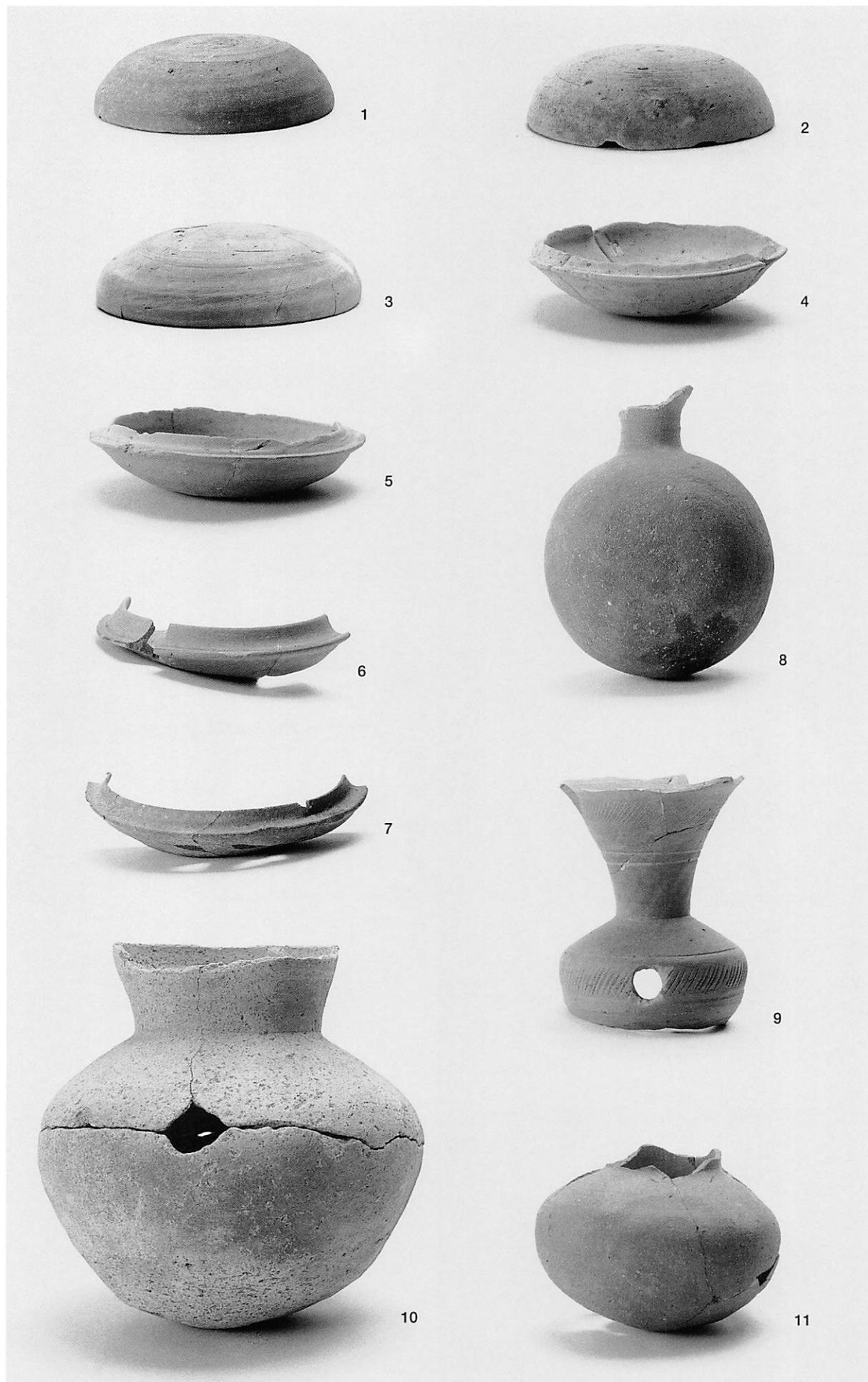
a 基底石検出状況
(東から)



b 同上 (北から)



c 掘方完掘状況
(東から)



出土遺物

報告書抄録

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第21集

原田岡山第2号古墳

東広島呉自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

発行日 平成19（2007）年2月28日

編 集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951
ホームページ <http://hmaibun.d-net.co.jp/>

発 行 財団法人 広島県教育事業団
〒730-0011 広島市中区基町4番1号
TEL (082) 228-8451 FAX (082) 228-8441

印刷所 西日本印刷株式会社